

## Invocation の談話分析に見る政治・宗教特性 —米国大統領就任式の事例から—

大加茂 巧

### 抄録

米国大統領就任式における新大統領のスピーチは最高の政治コミュニケーションだと言われる。スピーチの中にはレトリックが豊富に含まれており、そのテキストを対象に様々な種類のディスコース分析がなされてきた。何故なら、このような分析研究を通して、隠喩が明らかになり、新政権の選好や、アメリカ社会の変化を予測することができるからだ。

しかし、スピーチの前に聖職者によってなされる invocation (開会祈祷) の談話分析は軽視されてきた。本稿では invocation も戦略的な言語で表現されており、隠喩が含まれていると主張し、オバマ大統領1期就任式(2009)と2期就任式(2013)の invocation を対象にレトリック分析を試みた。

その結果、invocation が放つ宗教コミュニケーションというスピーチ技法も就任式を構成している重要な要素であることを示した。

### キーワード

大統領就任式、開会祈祷、レトリック分析、政治コミュニケーション、宗教コミュニケーション、隠喩

## The Political and Religious Characteristics Seen from the Discourse Analysis of Inaugural Invocation —Cases from the U.S. Presidential Inauguration—

Okamo, Takumi

### Abstract

The inaugural speech given by the U.S. new President is believed to be the supreme example of political communication. The speech is generally full of rich rhetorical expressions. Many types of the discourse analysis of those speeches have been made.

It is because some metaphor becomes apparent and the characteristic of the new administration as well as signs of social changes in America could be foreseen through those studies of analysis.

However, the discourse analysis of inaugural invocation offered by the clergymen before the speech has not been given attention to. This paper gave rhetorical analysis to two types of invocation at the first Obama inauguration in 2009 and at his second term inauguration in 2013.

This paper argues that each invocation has strategic discourse and includes remarkable metaphors. The author concludes that the speech skill of religious communication released by invocation is an integral part of the ceremony.

### Key Words

presidential inauguration, invocation, rhetorical analysis, political communication, religious communication, metaphor

## 目 次

1. はじめに
2. 談話分析とレトリック
  - 2.1 ターゲット・テキストと祈祷者の背景
3. 米国大統領就任式における invocation の系譜
4. オバマ大統領 1 期就任式における invocation

### 1. はじめに

Invocation とは「嘆願する」、「神などに加護、助けを懇願する」という意の動詞 invoke の名詞形である。通常、英語圏では祈祷と呼ばれるが、prayer とは違って、invocation は何らかの儀式「就任式、任命式、記念式典、冠婚葬祭等の人々が集まる行事など」の冒頭でなされる「開会の祈祷」という意味を含む。

キリスト教文化圏では invocation は通常、聖職者（牧師や司祭等）がなす務めである。聖職者の専有事項であると言っても過言ではない。Invocation という表現は教会で行なわれる通常の日曜礼拝等では使用されない。何らかのあらたまった行事や儀式のオープニングにおける懇願の祈祷である。Invocation によって一神教の神の臨在（臨席）を嘆願し、その儀式が単なる世俗のものではなく、権威ある儀式であることを内外に宣言するのである。

プロテスタント（新教）文化圏の儀式では、invocation で始まり、最後は benediction と呼ばれる「祝祷」で締めくくることが一般的である。つまり、メインのスピーチや exhortation（奨励、短い説教）、swearing（宣誓や誓い）等の前後に invocation と benediction を配置する構図である。

本稿では、2009年1月のオバマ米国大統領 1 期目の就任式 invocation と2013年1月の 2 期目就任式 invocation の両テキストを分析し、その背景にある宗教コミュニケーション<sup>(1)</sup> と政治コミュニケーション<sup>(2)</sup> のレトリックを明らかにする。公的な場（選挙演説や牧師の説教など）での言語使用を「セ

### の談話分析

5. オバマ大統領 2 期就任式における invocation の談話分析
6. 1 期、2 期 2 つの invocation に見られる差異
7. むすびに

レモニーなどに集まった特定多数の聴衆に対して、効果的にメッセージを発する技能や戦略である」（鈴木、2007）<sup>(3)</sup> とみなすコミュニケーション論を採用しつつ、談話分析の手法によって、それぞれの invocation が持つ宗教的、政治的含意を明らかにするということである。

新大統領の就任演説は新政権の政治カルチャーや政治的スタンスを予想するうえで重要である。それゆえ、スピーチ・テキストを対象にした政治ディスコース分析の先行研究<sup>(4)</sup> は多い。複数のスピーチライターが原稿を練るにしても、大統領就任演説は政治的というより、宗教的だと、inaugural address の研究者であるエリス<sup>(5)</sup> (Ellis) は主張している。

つまり、政治的言説を通して、宗教的隠喩が語られるのである。逆に invocation という宗教的言説を通して政治的隠喩が語られる場合もある。それゆえ、スピーチの前に聖職者によって披露される invocation の中には意外と新政権の政治カルチャーや政策選好のレトリックが存在することになる。

Invocation にはかなりキリスト教、ユダヤ教等の一神教的神学要素が含まれているせい、invocation の言語学的分析<sup>(6)</sup> ならびに解釈過程の分析等<sup>(7)</sup> の研究はあまり見られない。本稿が invocation を取り上げることで、スピーチの陰に隠れて見逃されてきた invocation 分析の重要性を喚起することが出来れば、十分に意義があると思われる。就任式などの式典で最後を締めくくると「祝祷」と呼ばれる benediction がある。この祈祷

は大統領就任式の場合、別の聖職者によってなされる。内容の濃い benediction もあるが、通常は定型化された祈りで、テキスト上でのバリエーションもあまりなく、今回は研究の対象とはしない。

## 2. 談話分析とレトリック

談話とはディスコース、すなわち口頭伝達、話しことばのことである。別名「言説」とも言われるが、話しことばには dialog と呼ばれる会話（2人以上の人々によってなされる口頭伝達のやりとり）、そしてスピーチのような演説、案内や説明のような short talk がある。さらに、話している相手が聴衆や観衆ではなく、目に見えぬ超越者なる神である prayer や invocation 等がある。

キリスト教文化圏で祈祷は日常的ディスコースとして大きな位置を占めている。この祈祷文化伝統は困ったときの神頼み的な懇願ではなく、日常的に一神教の神とコミュニケーションをとる口頭伝達手段である。決して声を出さない心の祈りではない。話しことばのディスコースである。個人的には prayer、公の場面や儀式では invocation という呼称になる。

以上述べてきた各種の談話には文を超えた意味や強調点が含まれていたり、何らかの主観的なバイアスがかかっていたりする。含意には特定の政治的主張、宗教的信念、プロパガンダ等が隠されている場合もある。表現の中には言語学的に同じパターン<sup>⑧</sup>のものがあったり、何らかの事柄を象徴的に語ったり、物語の筋<sup>⑨</sup>を形成して、聴き手を1つの方向へ誘導しようとするものもある。まさに談話の中には様々な言葉による仕掛けがある。

そのような前提に立って、それぞれの談話がどのようなメッセージを包摂しているかを明らかにするのが談話分析と呼ばれている。談話分析が「文を越えた言語」を扱うといわれる由縁である。最近では、テキストを丁寧に読み解く言語学的分析や解釈過程分析以外にも統計学やコーパス言語学、図形技術等<sup>⑩</sup>を使って分析する研究者も現れてき

た。

談話分析は学際的であり、英語学者、言語学者、人類学者から心理学者、社会学者、政治学者までかなりの広範囲にわたる領域で社会の特徴を解く手がかりとして用いられている。もちろん、談話分析は話ことばを中心に扱うが、書きことばや言語のデータ、音声等を分析することもある。談話分析の研究アプローチは現在のところ方法論がかなりあり、1つの形式に収斂されるものではない。

本稿ではターゲットとなる invocation の音声分析ではなく、あくまでテキスト分析をすることになる。談話分析手法の1つとして広く用いられてきたレトリック分析という手法を用いる。これはイデオロギー分析とも言われる。発話された公的ディスコースはたいていの場合、すべて文字通りの意味を持たず、隠喩が存在する。レトリック分析とはその隠喩の部分丁寧に掘り下げ、テキストに込められた含意を明らかにすることである。

レトリックは修辞学と言われているが、1人の話者がセレモニーなどに集まった多数の聞き手に対して（聞き手とは現場の出席者だけではなく、inaugural invocation [就任式の開会祈祷] の場合はテレビやネットメディアの視聴者も含めて）効果的にメッセージを発信するパブリック・スピーキングの技能と言い換えることもできる（鈴木、2007）<sup>⑪</sup>。鈴木によれば、米国の政治家には自らの言葉で政策を語り、選挙民を説得し、政敵を攻撃し、相手の攻撃から自己を守る伝統がある。それゆえ、政治コミュニケーションはレトリック研究の重要分野であるという。

公的な説得の技法として、コミュニケーション（スピーチ、演説、討論、説明等）はアメリカ政治に大きく関わっていると言えよう。このことは聖職者にもあてはまる。特に表舞台の大統領就任式で invocation を担当する聖職者の開会祈祷は宗教次元（星野）<sup>⑫</sup>を抱えているアメリカ政治において、新政権の方向性や政治文化特性を反映する。

Invocation のテキスト内容だけでなく、invocation を担当する聖職者の人選にも新大統領の選好や立ち位置が表われている。それゆえ、その特定の聖職者自身が一定のメッセージ性を表象しているのである。

## 2.1 ターゲット・テキストと祈祷者の背景

本稿では2009年1月20日に行なわれたオバマ大統領1期就任式で祈られたリック・ウォーレン牧師 (Rev. Rick Warren) の invocation テキストと2013年1月21日に行なわれたオバマ大統領2期就任式におけるマーリー・エバーズ・ウィリアムズ女史 (Myrlie Evers-Williams) の invocation を分析対象とする。

1期目の就任式で invocation を行なったリック・ウォーレンは米国プロテスタント福音派<sup>③</sup>を代表するカリフォルニアのメガ・チャーチ<sup>④</sup>の牧師であるが、アメリカ中で現在も論争を巻き起こしている同性結婚の合法化問題で、はっきり反対する立場を表明している。オバマ大統領が同性結婚の反対者であるウォーレンを invocation の担当者として選んだことに関して、当時 (2008年の年末まで)、同性愛者の人権団体を中心として激しい批判が出た。

アメリカでは LGBT 派<sup>⑤</sup> や civil unions<sup>⑥</sup> の人権・平等を訴える運動も勢力を増しているが、従来の伝統的価値を擁護する人々もキリスト教保守層を中心に根強い。オバマ大統領がリック・ウォーレン牧師を選んだ背景には5,000万人近い有権者を有しているキリスト教保守派、特に福音派への配慮があったと考えられる。就任式を締めくくる閉会祈祷 benediction ではバランスをとるために黒人で公民権活動家のジョセフ・ローリー牧師 (Rev. Joseph Lowery) を起用している。

近年、アメリカでは同性愛、中絶問題 (プロライフとプロチョイス派の対立) など国内世論を分断する論点が過激になっている。新大統領や大統領候補者がこのようなアメリカ社会を二分する社

会論争にどのようにバランスを取るかが政治生命に影響する。新しく選ばれたアメリカ大統領の就任スピーチだけでなく、invocation を行なう祈祷者を通して語る言説も保守派とリベラル派の双方をどうバランスよく制御し、政治的リーダーシップを発揮するかという点で重要なのである。

ウォーレンの invocation テキストは宗教的隠喩が多く含まれており、多民族、多宗教、多宗派、多文化 (しかし、それはすべて一神教の範囲) のアメリカ社会に配慮したものである。一般的な福音派教会でなす prayer や invocation とは少し趣が異なる内容である。

Invocation の最終部分に the Lord's Prayer (主の祈り、新約聖書マタイ伝6章9-13節) のフルテキストを付け加えたのも、就任式の invocation としては (1985年のレーガン大統領 (Reagan) 2期就任式を除いて) 例がないものと思われる。Almighty God に始まり、Amen で終わる483 words の開会祈祷である。

もう一方のターゲット・テキストはマーリー・エバーズ・ウィリアムズ女史の invocation である。画期的なのはマーリー・エバーズ・ウィリアムズという人選である。就任式の invocation 史上、最初に選ばれた女性一般信徒 (キリスト教) である。大統領就任式の歴史的経緯や文脈から invocation をキリスト教徒 (保守派、リベラル派、新教、旧教を問わず) 以外の人物が担うことはあり得ないが、キリスト教史の観点から見ても invocation は通常、聖職者の専有事項である。医者や弁護士が有している専有事項 (医療行為や法務活動等) とほぼ同じと考えてよいだろう。

そのようなキリスト教社会の共通認識や慣例を打ち破って、聖職者ではない一般信徒 (layperson) のエバーズ・ウィリアムズ女史が invocation を執り行った意義は大きい。聖職者は医師のように国家試験の合格によって得られる職位ではない。一般信徒だった人が神学を修めた後、聖典と呼ばれる宗教的儀式によって任命される職位である。そ

の任命式のことをカトリックでは「叙階」、プロテスタントでは「接手」、オーソドックス（正教）では「神品」と呼ぶ。

エバーズ・ウィリアムズ女史はミシシッピ州出身の人権活動家で、1963年に暗殺されたメドガー・エバーズ氏 (Medgar Evers)<sup>7)</sup> の未亡人である。聖職者ではない彼女が inaugural invocation 史上初めて選ばれたのは今まで聖職者の専有事項だった invocation の務めを一般信徒に開放したという意味である。オバマ大統領は宗教史的には画期的試みをしたことになる。

エバーズ・ウィリアムズ女史の invocation は神よ (O God)、父よ (O Father)、主よ (O Lord) で始まる通常の invocation と違って、アメリカよ (America) という呼びかけで始まる異例のものである。全体の構図は黒人や少数民族の辛苦の歴史をフラッシュ・バックさせた物語論形式を採った 549words の開会祈禱である。

### 3. 米国大統領就任式における invocation の系譜

大統領就任式は1901年より The Joint Congressional Committee on Inaugural Ceremonies (連邦議会就任式典合同委員会) が準備と実施の責任を担っている。この合同委員会はその時々で影響力のある与野党連邦上院、下院議員 6 名で構成されている。

歴代の合同委員会は就任式の儀式を以下のように定義づけている。

The Inauguration ceremonies represent both national renewal and continuity of leadership. As each president has offered a vision for America's future, we reflect on the heritage of Inauguration's past. (大統領就任式の儀式は国家的な刷新とリーダーシップの継続性を象徴している。それぞれの大統領がアメリカの将来に関するビジョンを提示してきたので、我々の準備や式典の手順なども過去の就任式の伝統を反映している。)

大統領就任式は米国大統領が政治的リーダーであると同時にアメリカ文化にとっての祭司的役割 (森、1999)<sup>8)</sup> も有しているゆえ、脱宗教的儀式になることはありえない。新大統領は the Bible に手を置き、連邦最高裁判事が宣誓を誘導するのであるが、就任演説の前後になされる祈禱 (invocation と benediction) は近年 civil religion<sup>9)</sup> を意識したものに变化している (森孝一の市民宗教論、1999)。

初代大統領のジョージ・ワシントン (George Washington) はキリスト教式礼拝の中で宣誓をしたが、それ以降は政教分離<sup>10)</sup> 方針の影響もあって就任式では invocation は禁止されていたという。Inaugural invocation の研究者であるマーチン・メドハースト (Martin Medhurst)<sup>11)</sup> によれば、1937年のフランクリン・D. ルーズベルト大統領 (Franklin D. Roosevelt) の就任式から invocation が定着したと言われている。ルーズベルトのニューディール政策を批判していた聖職者が多くいた中でカトリックの神父 (司祭) ジョン・ライアン (Father John A. Ryan) が一貫してルーズベルトを支持したことへの感謝から始まったとされる。

1937年の invocation は連邦議会付の牧師ゼバーニー・フィリップス (Rev. ZeBarney Phillips) が務め、benediction を友人の神父ジョン・ライアンが務めている。

それ以降、2013年に至るすべての就任式で invocation が行なわれた。その時々の大統領によって選ばれた聖職者が開会祈禱を通して、新政権の政治・宗教カルチャーを予見する役割を果たしてきた。同一人物が複数回 invocation を務めたこともしばしばだ。最多は4回の福音派伝道師のビリー・グラハム (Rev. Billy Graham)<sup>12)</sup> である。

大統領就任式は大統領選挙の翌年の1月20日に執り行われる。日曜日の場合は翌21日になる。式典会場は1981年のロナルド・レーガン大統領 (Ronald W. Reagan) の就任式から連邦議会議事堂の西側正面である。筆者もその場所に立ったが、

通常は使われていない議事堂の裏側である。ナショナル・モールと呼ばれる細長く西へ伸びる広場が見渡せ、その広場のずいぶん先にリンカーン記念堂がある。100万人以上がその広場を埋め尽くすことも可能だ。幅 400m、長さ 2 km の広大なスペースである。

Inauguration Day と呼ばれる就任式当日の手順は2009年の場合、前述の合同委員会委員長ダイアン・ファインシュタイン上院議員 (Dianne Feinstein) による開会宣言の後、リック・ウォーレン牧師の invocation があり、副大統領、大統領の宣誓、大統領の就任演説、詩の朗読を経て、ジョセフ・ローリー師 (合同メソジスト教会の牧師) の benediction で締めくくられた。

2013年の場合は、合同委員会委員長チャールズ・シュマー上院議員 (Charles E. Schumer) による開会宣言に続き、マーリー・エバーズ・ウィリアムズ女史の invocation が非聖職者として初めて捧げられた。それ以降は2009年と同じ流れで、最後は聖公会の司祭ルイス・レオン師 (Rev. Luis Leon) による benediction で締めくくられた。レオンは2005年のジョージ・W・ブッシュ大統領 (George W. Bush) の 2 期就任式で invocation を捧げた聖職者である。

#### 4. オバマ大統領 1 期就任式における invocation の談話分析

テキスト分析の対象は言うまでもなく、リック・ウォーレン牧師の開会祈祷である。ウォーレンの invocation はキリスト教界という「Speech Community」<sup>98</sup> で頻繁に使用される用語が満載である。Invocation の audience (聴衆) は出席者やメディアの視聴者だけではない。聞き手として目には見えない超越者なる神がいるという前提で発声される。ここがスピーチとは決定的に違うところだ。聴衆に呼びかけるのではなく、聴衆を巻き込んで、全員で目に見えない神に呼びかけるのだ。まず、言語学的分析 (linguistic analysis) と社会文化

的分析 (sociocultural analysis) を中心に見ていきたい。

ほとんどの invocation が Oh, God という呼びかけで始まる。ウォーレンも Almighty God, our Father (全能の神、われらの父) という呼びかけで始まっている。過去の invocation もそのほとんどが類似した表現、Eternal God, Our God, Gracious God 等で始まっている。ウォーレンが使った Almighty God という表現は invocation が始まった1937年にゼバーニー・フィリップスが使って以来である。

大文字の God という語はもちろん一神教の絶対者なる唯一の神を意味するが、同義語辞典の「Roget's New Pocket Thesaurus」によれば、the Supreme Deity, the Absolute Being など30種類の同義語に混じって the Almighty が出てくる。

Almighty が大文字になると全能者という意味になるが、宗教的な用語として Omnipotent (すべてにおいて絶大な力を持つ全能の神) の意味と重なる。人間的には出来なくても、神には不可能はないという新約聖書 Matthew (マタイによる福音書) 19章26節の「With men this is impossible; but with God all things are possible」(KJV, King James Version 欽定訳1611年) を含意として含んでいる。

次に第 2 パラグラフにある「The Scripture tells us, “Hear O Israel, the Lord is our God. The Lord is One.”」という表現を取り上げる。「Hear O Israel」という呼びかけは旧約聖書の中で神が預言者を通してイスラエル民族に語られるという設定で頻繁に用いられた技法である。Israel はキリスト教文脈では旧約時代のイスラエル民族を指す呼称である。それゆえ、Israel の表現にはアメリカ国内のキリスト教各宗派の一神教を背景に持った人々を含め、ユダヤ系アメリカ人にも配慮した意図がある。福音派ではユダヤ人は選民であり、終末の時代に特別の役割を持つという神学がある。この Israel は中東の独立国イスラエルを意

味するだけでなく、キリスト教信者を広く意味する解釈もある。

しかし、この Israel という表現は当時、アメリカ国内のイスラム教徒などを刺激した。この表現はアメリカが今後も政治的にイスラエル寄りを踏襲すると見られたのだ。

The Lord is one という表現の one は神は1つ、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教にとっても同じ唯一の神を信仰しているという意味で、アメリカ国民の結合を促している。

第3パラグラフ「We celebrate a hinge point of history with the inauguration of our first African American president of the United States. We are so grateful to live in this land, a land of unequalled possibility, where the son of an African immigrant can rise to the highest level of our leadership. And we know today that Dr. King and a great cloud of witnesses are shouting in heaven.」のこの部分ではアフリカ系アメリカ人のオバマ氏がアメリカの最も高いレベルの指導的地位に就くことは歴史上画期的な事であり、このような機会を提供できる国はアメリカ以外にないと賞賛している。オバマ氏を大統領にまで押し上げていくことを可能にしたアメリカは世界でも無類の国であるとしてアメリカ国民の誇りを鼓舞している。

後半の「And we know today that Dr. King and a great cloud of witnesses are shouting in heaven.」という表現は新約聖書ヘブル書 (Hebrew) 12章1節と重なる。A cloud of witnesses は KJV で用いられた表現で、日本語では「雲のように私たちを取り巻いている多くの証人」(新改訳聖書、日本聖書刊行会)と訳されている。英語では a cloud of locusts (イナゴの大群)、a cloud of arrows (雨あられと飛んでくる矢) という使い方で「大群」「数えられないくらい多くの」という意味である。

この文脈でウォーレンは地上では報われないで

死んだ無名で無数の人々を「a great cloud of witnesses」という表現で描写している。「witness」は証人、目撃者という意であるが、ここでは「同じ思い、志を持った者」というニュアンスがのぞいている。キリスト教史において数え切れない信仰者が時には殉教者として、信仰の約束を見ないままに死んでいった。同じようにこの invocation 文脈では公民権の獲得や平等の実現などを求めながらも、その成就を見ずして死んでいった無数の黒人たちを信仰者 (witnesses) に重ねているのである。

しかも、それらの故人たちは天において復活しており、天から黒人大統領の誕生を見て拍手喝采しているというのである。このような表現によって多くの黒人たちは溜飲を下げた。

第4パラグラフでは新大統領に「wisdom」「courage」「compassion」を授けたまえと祈っている。キリスト教文化圏では、どれも高く評価されているリーダーの資質である。「wisdom」はソロモン王<sup>24</sup>、「courage」はダビデ王<sup>25</sup>やヨシュア<sup>26</sup>、「compassion」はイエス・キリストに顕著に見られる資質である。

さらに第5パラグラフではアメリカが持つ多様性を前提に、それぞれの人種、文化、宗教グループが独善に走らないように「with the respect that they deserve」という表現を使って、異なる者に敬意を持つよう促している。そしてアメリカがさらに前進し、神の加護を受ける条件として

- 1) clarity in our aims
- 2) responsibility in our actions
- 3) humility in our approaches
- 4) civility in our attitudes

という4つの key 表現が重要であると指摘する。「clarity」とはアメリカの国家目標、政策の趣旨について国民の誰もがわかる明快さを求めている。「responsibility」はアメリカの行動には責任が伴うということで、「humility」とはアメリカが実行する諸政策や方針においては謙虚さが求め

られるということを示唆している。「civility」とは差異がある他民族、他文化、他宗教の人々と接する際、持つべき態度は横柄ではなく、優越感でもなく、礼儀正しさと思慮深さであるという意味だ。

これは「説得」のレトリックである。説得とはまさにレトリックの目的そのものである。鈴木<sup>6)</sup>がアリストテレス (Aristotle BC 384-322) を引用して、「いかなる状況においても説得の手段を見出す能力」がレトリックの能力だと述べているが、ウォーレンは明確な key words を使って説得するレトリックの使い手だと言える。

第6パラグラフで注目すべき表現は「one day all nations and all people will stand accountable before you.」である。この箇所は新約聖書ローマ書 (Romans) 14章12節「So then every one of us shall give account of himself to God」(KJV) 「こういうわけですから、私たちはおのおの自分のことを神の御前に申し開きをすることになります」(新改訳聖書) からの引用である。

神の御前とは最後の審判を表しており、キリスト教文脈では神の前に隠しおおせるものはないので、国家も個人も不正をせず、誠実に生きるべきだという主張が隠喩として存在している。このような人生観は特に福音派では強調される。この表現を聴いて全米の福音派有権者たちは大きく賛同したはずだ。

第7パラグラフの「I humbly ask this in the name of the one who changed my life, Yeshua, Isa, Jesus (スペイン語の発音)、Jesus (英語音)、who taught us to pray」の部分が今回の invocation で最も controversial (議論を呼んだ) な箇所になった。

In the name of という形で通常のキリスト教祈禱は終了する。of の後には Jesus が入るのが一般的である。祈りの結語表現は in the name of God や in the name of Father ではない。キリストは神学的に救世主、大祭司でもあるので、父なる神

と人間を仲裁する(つなぐ)立場にいると考えられ、Jesus の名称を使用する。イエスの名前のゆえに、イエスの名前に免じて、イエスの名前を通してという意味で、in the name of Jesus, I (we) pray という形式で祈禱が終了する。

この伝統から考えれば、ウォーレンの「in the name of the one」という表現は異例であり、キリスト教福音派からは相当の物議を醸し出した。しかし、別の見方からすれば、inaugural invocation は教会や宗教的集会の場ではないので、civil religion を強く意識したウォーレンの苦肉の策とも言えよう。

Jesus (英語音のみ) を通常の形で持ってくれば、キリスト教(白人、プロテスタント)以外の国民から批判され、また政教分離の観点からも許されないと攻撃される可能性があった。ただ、過去の invocation には in the name of Jesus (英語音のみ) を使用して祈禱を終了した例も数多い。しかし、現在のアメリカはキリスト教人口や白人の人口が減少し、多文化、無宗教の人口も増大しているので、civil religion を意識した言説は invocation においても益々重要になってくると思われる。

さて、その「the one」という表現だが、もちろん「one」は「人」という意味の代名詞で the を伴い「who」という主格の関係代名詞が続くが、「神」「イエス・キリスト」を表象し、「~のお方」という意味になる。この「the one」を使用しているのは「イエス・キリスト」をぼかすという意味合いと、「the one」の同格として一神教である他の宗教を配慮して複数の「イエス」名を並列するという技法が採られている。

同格として「イエス」のヘブル語(ユダヤ教)「Yeshua」(ヤシュア)、イスラム教での同格名「Isa」(イーサー)が使用され、ヒスパニック住民のためには「Jesus」をスペイン語発音(ヘスス)で発声している。Inaugural invocation ならでは「civil religion」的志向が発揮されている。こ



れは多様性をもっているアメリカ国民をバランス良く配慮する宗教コミュニケーションのレトリック手法である。

最終パラグラフの部分は有名な「主の祈り」の全文テキストなので分析は割愛する。

## 5. オバマ大統領 2 期就任式における invocation の談話分析

初の女性一般信徒マーリー・エバース・ウィリアムズ女史の invocation はかなり珍しいスタイルで始まった。歴代の invocation の冒頭は O Lord, Our God, Eternal God, という神への呼びかけで始まるが、エバース・ウィリアムズの場合は「America」で始まり、神ではなく、アメリカという国家・国民に呼びかけた。

これは invocation としては異例のスタイルで、第 1 パラグラフのテキスト、特に「We come at this time to ask blessings upon our leaders, We are here to ask blessings upon our armed forces」の部分では「～に祝福を与えたまえ」と祈っているが、その祝福を与える動作主が不在である。祝福の対象者は明確であるが、その祝福を与える動作主を省略して、「神」への祈りであるというスタイルを薄めている。通常は「ask」の後に「you」が入る。かなりリベラルな祈りであると言える。

第 2 パラグラフでは新大統領やその政権に神の導きと加護を求める代わりに、dignity, inalienable rights, be honored, the Emancipation Proclamation, the March on Washington, spirit of our ancestors, unborn hopes, a history of disenfranchised 等の表現を使って、先人の黒人たちが公民権、差別撤廃、平等、選挙権を求めて苦闘した歴史を物語風に回顧している。ただこの第 2 パラグラフの後半になって初めて、この開会祈りの呼びかけ先が almighty, your guidance という表現で「神」だと認識できる構成になっている。

これはよくある型通りの祈りスタイルよりも、時系列で黒人の辛酸に満ちた歩みの物語を優先す

ることで、祈り者自身もその仲間であることを強調する「同一視」<sup>88</sup> というレトリック技法に近い。

第 3 パラグラフでは 1963 年に人種差別主義者によって暗殺された夫のメドガー・エバース氏を回想している。自由と公平のために戦って死んだ多くの故人たちの精神が現世で生きている人たちと繋がる時、アメリカには希望があると、アーリントン墓地に眠っている人々も引き合いに出している。

アメリカは多様性を持った国であるゆえ、少数派とメインストリーム<sup>89</sup> の中にいない人々にも公平さと平等を配慮して欲しいという「説得」のレトリックが以下の表現にも見られる。

「Please continue to bless his efforts to lead by example in consideration and favor of the diversity of our people.」

そして第 3 パラグラフの後半部分で初めて「We ask that you grant our president the will to act courageously but cautiously when confronted with danger and to act prudently but deliberately when challenged by adversity.」とあるように祝福を受ける動作主が「you」(神)であることをさらに明瞭にした。

新大統領には勇気を持って、かつ慎重に行動する意思、用心深く、思慮深く行動する意思を授けて下さいという祈りである。これは同時多発テロ以降、テロとの戦いの名の下、イラク戦争やアフガン戦争に突き進んで行った近年の単独行動主義を牽制する祈りであったと考えられる。

その他、strong, fierce, vigilant という表現を使ってアメリカは自由が脅かされる時、強い国家であり、激しく行動する国民である。自由を奪う動きに関しては油断せず警戒をする国であることをアメリカ国民だけでなく、全世界に向けてメッセージを送っている。

第 4 パラグラフから最終のパラグラフまでは語数も少なく、内容的にも特徴がないと思われるので分析は割愛する。ただ最終パラグラフの祈りの

結語部分で福音派のウォーレンも使用しなかった単独の「Jesus」（英語音のみ）を In Jesus name we pray という形で結んだのは意外である。リベラル色が強いと思われた女史であるが、祈祷前半で公民権運動の回想部分が強かったので、バランスをとったと考えられる。

## 6. 1期、2期2つの invocation に見られる差異

1期目を担当したウォーレン牧師の開会祈祷は締めくくりの部分「I humbly ask this in the name of the one who. . . . .」の「the one」以外は総体的にキリスト教保守派、福音派を満足させる切れのいい祈祷である。祈祷は神に向かっての祈りであり、神への呼びかけであるということがはっきり分かるスタイルである。

一方、2期目を担当したエバース・ウィリアムズ女史の開会祈祷は「アメリカよ」という呼びかけで始まった。祈祷の大半が公民権運動の歩みを時系列で追っていった回想のスタイルである。特に、その祈りが神への呼びかけであるというより、アメリカ国民に向けて語った意図が強い。

ウォーレンの invocation	
宗教的 key words	政治的 key words
Almighty God, our Father, your glory, the Scripture, O Israel, the Lord, Our God, merciful, Jesus, a great cloud of witnesses in heaven, Help us, stand accountable before you, the Lord's Prayer full text	humility, O Israel, integrity, our commitment to freedom, clarity, responsibility, civility, seek the common good, more prosperous nation,

エバース・ウィリアムズの invocation	
宗教的 key words	政治的 key words
a great cloud of witnesses, your grace, the opportunity of prayer, holy, right	everyone is included, inalienable rights, disenfranchised, inherent dignity, strong, fierce, vigilant in our pursuit of freedom, danger, adversity, favor of the diversity, the Emancipation Proclamation, the March on Washington,

【筆者が作成】

以下、いくつかの key words を比較して、この2つの invocation に見る宗教特性と政治特性の違いを簡潔に概観してみたい。

まず、宗教的 key words であるが、福音派を代表する聖職者として選ばれたウォーレンの祈祷の中には聖書の引用が多く、聖書中心主義的<sup>99</sup>な色合いが濃い。キリスト教リベラルではなく、聖書を文字通り解釈し、受け入れる福音主義の色彩である。最終部分を the Lord's Prayer 全文で埋めているのは invocation としては珍しい部類であるが、祈祷である以上、批判を受けにくい手法である。なぜなら、the Lord's Prayer というのはキリスト教文化圏の基盤となる根っこの部分を形成してきたからである。

神が超越者として wisdom, courage, compassion を新大統領に授けたまえというのは supremacy (至高権) がアメリカの国家指導者の上にあるというパウロ神学<sup>100</sup>を表象している。地位の高いリーダーが腐敗しないように、その政のために祈れというアメリカで人気の高い聖書箇所とも一致する。

逆にエバース・ウィリアムズの宗教的 key words は聖書からの直接引用がほとんどなく、key words もウォーレンほど豊富ではない。公民権運動の戦いの最中で死んだ同志の黒人たちを a great cloud of witnesses と表現し、天国にいる先人たちの努力があったから今日を勝ち得たと、新約聖書へブル書12章の表現が引用されている。

しかし、これ以外あまり宗教的 key words は見られない。換言すると、ウォーレンの開会祈祷はある程度抑制はされているものの、聖書主義を前面に出しており、神に直接呼びかける懇願型である。一方、エバース・ウィリアムズの開会祈祷は回想型である。初めて黒人の大統領が誕生するまでになったこと背景に先人たちの辛酸をなめる労苦があり、よくこんな遠くまで（黒人大統領の出現）来たという現実に対して、聞き手の賛同を求めようとしている。

政治的 key words ではウォーレンは指導者の政

策よりもリーダーシップの質、指導者の資質に関心を寄せている。政策的には自由を擁護し、公益を求め、イスラエルを重視する姿勢が窺える。全体的にはウォーレン自身のベストセラー本 [The Purpose Driven-Church] (リーダーシップ論を展開した内容)<sup>68</sup> を想起させて、健全な国家運営を求めている。

一方、エバース・ウィリアムズの invocation の重点は宗教的 key words よりも政治的かつ人権擁護的 key words に置かれているようだ。「Everyone is included」という表現は（一人ももれることなく、すべての人がアメリカ国民としての権利がある。）というニュアンスだが、これを政治的 key words 的に見ると人権、公民権の平等ということになる。宗教的文脈で見れば、「the diversity」という表現は同性愛者もアメリカのキリスト教は受容できるというレトリックにもなりうる。

第2期オバマ政権では宗教的に世論の賛否が分かれている同性愛や中絶問題、特に同性結婚の合法化を加速させるのではないかという期待を予見させる祈りである。奴隷解放宣言 (1862)、公民権法の成立 (1964) という表現を祈祷内容に挿入し、新政権では同性愛者の人権に考慮して欲しいというリベラル派の宗教コミュニケーションでもある。

The Pew Forum on Religious & Public Life<sup>69</sup> という調査でも判明しているように、第2期オバマ政権はアメリカ史上初めて国民の主流を占めていたプロテスタント・メインラインが過半数を割った時代の中でスタートした。益々、アメリカ社会の多様化が深化していくと予想される。

それに従って、今までアメリカの伝統的宗教文化の中で揺るがなかった中絶反対や同性愛反対などの考え方が、新しいリベラル主義の流れの中で弱体化する可能性がある。反同性愛、反中絶、反進化論などはアメリカの保守的キリスト教の特徴を最も表したものである。それゆえ、現在に至るまでこれらのテーマを巡って、文化論争<sup>70</sup> が絶えなかった。

エバース・ウィリアムズ女史の祈祷は、前年の2012年5月にオバマ大統領が現職の米国大統領として初めて同性結婚賛成<sup>71</sup> をメディアで表明したことと coherence (一貫性) があると言える。

ウォーレンは単独行動主義やネオコンの暴走によって悪評を得た前政権からの教訓として invocation の中に humility, clarity, responsibility, civility などを挿入した。新政権が世界に対して謙虚さを保ち、単独行動主義にならないように思慮深く行動し、その政策には透明性を担保するように願った政治コミュニケーションと言えよう。

一方、エバース・ウィリアムズの政治的 key words の中には strong, fierce, vigilant, danger, adversity などの用語が含まれていて、アメリカは自由を脅かす勢力に対しては強く、激しく行動する、自由を守るために油断せず、警戒を続けるという政治コミュニケーションが発信されている。

さらに「the least of those」という表現で、最も弱い立場の人々を考慮する政策（福祉、国民皆保険制度）を追求して欲しいと政治コミュニケーションのレトリックを投げかけていると言える。

換言すれば、ウォーレンのレトリックが述べているのはアメリカは思慮深く、謙虚になって他者に聞き、単独行動や独善的政策を抑制した政治特性が必要だと言うことである。

エバース・ウィリアムズは自由のためには強く行動するアメリカを求めると同時に、多文化の中で少数派マイノリティーが持つ多様な価値観も軽視しない政治カルチャーを新政権に切望していると感じられる。

## 7. むすびに

染谷<sup>72</sup> が言うように「ことば」は聞き手に対して一定の価値観やイメージを与えるものである。そして話し手は（特に speech や invocation などの場合）相当準備された戦略的意図をもって言語を使用する。Invocation の中に出現する語彙や語句が偶然に、また気まぐれに出てくるわけではな

い。そこには十分に考え抜かれたレトリックが満載されている。

特に4年に1回の inaugural invocation となればなおさらである。全世界に影響を与えるアメリカの大統領の就任演説には多彩なレトリックが隠されているのは、鈴木他<sup>87)</sup>の研究で明らかであるし、高木<sup>88)</sup>などの研究で見られるようにそれらのスピーチはレトリック面や批判的談話分析(CDA)の側面からも多く分析されてきた。

しかし、アメリカの大統領は行政の長、選挙で選ばれた政治家であるだけでなく、多様なアメリカ国民を統合するシンボルとしての司祭的役割も持っている。大統領のスピーチは政治的、文化的であると同時に宗教的でもある。政教分離によって国教を持たないアメリカではあるが、アメリカ政治には宗教的次元が多く存在する。

その中でも政治にからんで宗教コミュニケーションを発信する invocation, 特に4年に1度の inaugural invocation のレトリック分析はあまり研究されてこなかった。しかし、invocation 分析によってスピーチ分析では見えなかった新政権の特性が見え隠れする場合がある。アメリカ政治はスピーチではなく、invocation で始まると言っても良い。どんな背景の人(聖職者)が invocation を担当するのも重要事項である。

実は就任式の前後にある関連行事も含めて、invocation には2種類あることがあまり知られていない。表舞台の invocation は就任式当日の演壇でなされるもの。もう一方の裏舞台でなされる invocation はあまり光景が露出されない Presidential Inaugural Prayer Breakfast (通常、ホワイトハウス近くの聖公会の教会で行なわれる新大統領主催の朝食祈祷会)で捧げられる。

歴代の政権はこの表舞台の invocation と裏舞台の invocation を上手く使い分けてきた。一方が福音派、保守派の聖職者なら、もう一方はリベラル派、人権派の聖職者が担当するなどして、アメリカ国内の2大勢力、キリスト教保守派とリベラル

派のバランスをとってきたのである。

本稿における invocation のレトリック分析はオバマ政権で2回なされた就任式の開会祈祷をテキストにした。その結果、スピーチの陰に隠れて宗教儀式的に見える invocation も通り一遍の無機質な内容ではなく、隠喩部分を多く含み、十分分析対象になりうることを明らかにした。

祈祷者はよく練られた戦略的言語を使用しており、宗教コミュニケーションと政治コミュニケーションを実演しているのである。Invocation に関する各種分析はその時々の新政権の政治カルチャーとアメリカ社会の変化を察知する上で欠かせない研究だと言える。今後は就任演説と invocation を比較しながら、関連性や、coherence についても掘り下げることができれば研究が広がるし、コーパス言語学的アプローチによって歴代の invocation 語彙データを分析することなども必要となるであろう。

#### (注)

- (1) 政治の方向性や公共政策に宗教的スタンス(キリスト教保守かリベラル)が影響するアメリカにおいて、invocation や公的機関(議会、軍など)で聖職者が宗教用語を用いて語る言説、または説得のこと。筆者の定義。
  - (2) 演説、スピーチ、討論、invocation 等が政治的シンボルを現わす用語を使ってなす、公的な説得技法。コミュニケーションとは「意味」が人々の間で共有されていく過程。鈴木健『政治レトリックとアメリカ文化』朝日出版社、2010年、p.14, p.24.
  - (3) 菅野盾樹編、鈴木健『レトリック論を学ぶ人々のために』世界思想社、2007年、p.119.
  - (4) 朴育美「Obama のナラティブが顕在化させるアメリカ社会のディスコースと人種のフレイム」時事英語学研究 No.49, 2010年、pp.3-16.  
佐藤貴子「レトリカル・ジャンルとしてのアメリカ党大会指名受諾演説」時事英語学研究 No.39, 2000年、pp.29-42.  
高木佐知子「政治ディスコースの coherence に関する一考察、ブッシュ大統領のスピーチを題材として」時事英語学研究 No.42, 2003年、pp.35-49.
- 上記の研究はアメリカ大統領の発話、演説、スピーチ等を談話分析や批判的談話分析の側面から研究している。
- (5) Ellis, Odie L, *Inaugural*, Xlibris Corporation, 2009, p.9.

- (6) 高木佐知子「米国テロ・イラク戦争のメディア報道におけるイデオロギー」時事英語研究 No.43, 2004年、pp.51-52.  
Linguistic analysis は語彙、文法、語用論等を中心とした分析に加えて、一貫性やターン・テーキング（話者交替）などについても分析する。どのように言語システムから主張を選択しているか、それによってどのようなイデオロギーが提出されているかを明らかにすること。
- (7) 高木が前掲書、p.52 の中で intertextual analysis として説明している。節や文の機能、語彙などによって判別される情報を分析することで、その解釈がいかにか他のテキストの知識に依存するかということ。また、テキストが現在の社会的慣行や既存の概念とどのように関わっているかを調べることでとしている。
- (8) 菅野盾樹編、鈴木健、前掲書、p.121 「再言」というレトリック技法。
- (9) 鈴木健、前掲書、p.188.  
政治コミュニケーションの技法で「物語論」と呼ばれる。
- (10) 頻度の高い key words が図形の中で他より大きく写し出されて1つのデザインを形成する。「word clouds」と呼ばれる。Wordle (<http://www.wordle.net>) というサイトを利用して語彙データを入力して作成する。
- (11) 菅野盾樹編、鈴木健、前掲書、p.119.
- (12) 森孝一編、尾野俊也『アメリカと宗教』日本国際問題研究所、1999年、pp.157-180.  
アメリカ政治や外交にはレトリックのもととなる指導原理に時代を越えた宗教的概念が反映されているとする。それは特定の宗教や宗派を指すわけではないが、「神」を意識した宗教的概念であると指摘する。
- (13) 福音派とは特定のキリスト教宗派（教派）を指すわけではなく、聖書主義、すなわち聖書を文字通りの意味で解釈する立場を採っている人々のこと。世襲のキリスト教徒ではなく、成人してから信仰に目覚めた人々で「ブーン・アゲイン」新生体験を持つ。主に白人が中心で南部バプテスト連盟から、単立（独立の無教派）まで、宗派的に幅が広い。全米成人人口の24.6%を占めると言われる。福音とは「良い知らせ」という意味でギリシャ語由来。下記に詳しい。飯山雅史『アメリカの宗教右派』中央公論新社、2008年。
- (14) 福音派の中でも特にペンテコステ派（聖霊派）に多く、教会員数千人以上の巨大教会を指す。リック・ウォーレンはカリフォルニアの南部バプテスト系サドルバック教会（Saddleback Church）の主任牧師で、日曜礼拝には平均で2万人の人々が出席すると言われる。全米で8位の規模（2013年現在）2008年、大統領候補のオバマとマケインがこの教会を訪れ、市民との対話集会を開いたのは有名である。
- (15) lesbian, gay, bisexual, transgendered の人々を指す。
- (16) 主に同性間カップルを対象として、結婚に似せた法的立場を承認するパートナー関係。合法的結婚とは同じではない。
- (17) 元「全米黒人地位向上協会」ミシシッピ州支部ディレクター。黒人たちに選挙権登録を促したり、教育現場での黒人差別に対して戦った。1963年6月自宅付近で人種差別主義者によって暗殺された。
- (18) 森孝一『宗教からよむアメリカ』講談社、1999年、p.81.  
米国大統領は「アメリカの見えざる国教」の大祭司である。「神」とアメリカ国民との仲立ちをする役割を持つと主張する。
- (19) 宗教社会学者ロバート・ベラー（Robert N. Bellah）がもともと唱えた用語で、宗派色が強いキリスト教とは別の「市民宗教」と言われる。「アメリカの見えざる国教」とも言われる。人工宗教として「国家としてのアメリカ」が「神」の意思を行い、神の加護があるように祈る際の受け皿。宗派、教派を超えたレトリック的宗教として存在する。森孝一、前掲書、p.83.
- (20) 政教分離にあたる英語は「Separation of Church and State」であって、「Separation of Politics and Religion」ではない。アメリカ憲法修正第1条は「連邦議会は宗教の公定化、あるいは宗教活動の自由な実践を禁ずるいかなる法律も制定してはならない。」とある。政府が特定の教会（教派）に特別の便宜を図ってはならないという意味である。決して、公の場で宗教的儀式を行なってはならないという意味ではない。アメリカは特定のキリスト教宗派を国教として持たないということが政教分離の意味である。ただ、キリスト教がアメリカの宗教伝統的国是であっても、近年のリベラリズムの拡大と宗教保守主義の衰退のせいで、1937年まで invocation を就任式では控えていた。
- (21) スピーチライティングと就任式開会祈祷の研究者で政治学者でもある。ベイラー大学教授。[http://www.huffingtonpost.com/2013/01/20/religion-tensions-inauguration-n\\_25119.html](http://www.huffingtonpost.com/2013/01/20/religion-tensions-inauguration-n_25119.html)
- (22) アメリカで最も有名な福音派伝道者。歴代の inaugural invocation の祈祷者として有名。ホワイトハウス付の宗教顧問としても活躍。ビリー・グラハム伝道協会名誉会長として邦訳の著書も多い。95歳（2013年現在）
- (23) 林宅男『談話分析のアプローチ』研究社、2008年、p.197.  
共通の言語や言語使用の規範をも用いて、コミュニケーションを行なう人々の共同体。
- (24) 旧約聖書の中に登場する知恵王として有名。旧約時代の統一イスラエル王国第3代の王。
- (25) 旧約聖書に登場する最も有名な王。旧約時代の統一イスラエル王国第2代の王。
- (26) 旧約聖書に登場する勇気ある人物で、モーセの後継者。
- (27) 菅野盾樹編、鈴木健、前掲書、p.112.
- (28) 菅野盾樹編、鈴木健、前掲書、p.122.
- (29) メインストリームは元来、アメリカ社会では白人のメソジスト派や聖公会などを中心とする福音派以外の伝統的多数派の宗派（保守派やリベラル派双方を含む）

- に属する人々と定義されてきた。しかし、エバース・ウィリアムズの文脈では伝統派、福音派を問わず、白人のキリスト教という宗教圏のことを指す。
- ③0 福音派の特徴を表象する神学的な立場。聖書を生きた言葉として、文字通りの意味に解釈し、現代に適用する。進化論、中絶、同性婚などには反対する立場を堅持している。
- ③1 新約聖書に登場する元熱烈なユダヤ教徒で、キリスト教に改宗した大伝道者。指導者は神の下にあり、指導者のために祈ることは社会を安定させるという神学を持っていた。新約聖書第1テモテ2章1節にその神学思想が凝縮されている。
- ③2 邦訳で『健康な教会への鍵』。日本のキリスト教界でもベストセラーになった。原著は1995年に出版されるとすぐ、ミリオンセラーとなり、全世界でも40万人以上の牧師が影響を受けたとされる。
- ③3 ワシントン DC にあるシンクタンク「ピュー・リサーチ・センター」(Pew Research Center) が2012年に行った調査。
- ③4 文化論争は宗教的要素が強い。アメリカの文脈では進化論をめぐる裁判が行なわれた「スコープス裁判」(1925) が文化論争の発端となった。現在でも、進化論、創造科学、中絶、同性愛、公共の場における宗教的オブジェの展示等を巡って、争いが絶えない。
- ③5 2012年5月9日、オバマ大統領は現職の米国大統領として初めてABCテレビインタビューで「I've just concluded that for me personally it is important for me to go ahead and affirm that I think same sex couples should be able to get married.」と発言して、同性婚を肯定した。
- ③6 染谷泰正「Speech War! マケインはなぜオバマに負けたか」時事英語学研究、No.49, 2010年、p.65.
- ③7 鈴木健、前掲書、pp.64-86.
- ③8 高木佐知子、前掲書、pp.39-46.

#### 参考文献

##### [英語文献]

Ellis, Odie L, *Inaugural*, Xlibris Corporation, 2009

##### [邦語文献]

飯山雅史『アメリカの宗教右派』中央公論新社、2008年  
菅野盾樹編『レトリック論を学ぶ人のために』世界思想社、2007年

鈴木健『政治レトリックとアメリカ文化』朝日出版社、2010年  
林宅男編『談話分析のアプローチ』研究社、2008年  
森孝一編『アメリカと宗教』日本国際問題研究所、1999年  
森孝一『宗教からよむアメリカ』講談社、1999年

##### [邦訳文献]

Cameron, Deborah, 林宅男監訳『話し言葉の談話分析』研究社、2012年

##### [学術誌、論文等]

- 浅野雅巳「9.11テロ英語報道に関するディスコース分析」  
時事英語学研究、日本時事英語学会、No.42, 2003, pp.1-19.
- 佐藤貴子「レトリカル・ジャンルとしてのアメリカ党大会指名受諾演説」時事英語学研究、日本時事英語学会、No.39, 2000, pp.29-42.
- 染谷泰正「Speech War! マケインはなぜオバマに負けたか」時事英語学研究、日本時事英語学会、No.49, 2010, p.65.
- 高木佐知子「政治ディスコースの coherence に関する一考察、ブッシュ大統領のスピーチを題材として」時事英語学研究、日本時事英語学会、No.42, 2003, pp.35-49.
- 高木佐知子「米国テロ・イラク戦争のメディア報道におけるイデオロギー」時事英語学研究、日本時事英語学会、No.43, 2004, pp.51-61.
- 中西満貴典「堤諭概念による他者化表象のフレーム分析、2003年米国大統領一般教書が呈するイラクの表象分析」時事英語学研究、日本時事英語学会、No.43, 2004, pp.1-13.
- 朴育美「Obama のナラティブが顕在化させるアメリカ社会のディスコースと人種のフレーム」時事英語学研究、日本時事英語学会、No.49, 2010, pp.1-16.
- 渡部敬子「パレスチナ問題英語報道に関するクリティカル・ディスコース分析」時事英語学研究、日本時事英語学会、No.43 2004, pp.15-27.

##### [インターネット等資料]

「Inaugural Prayer through history — the Ultimate Archive」

<http://blog.beliefnet.com/stevenwaldman/2009/01/inaugural-invocations-and-pray.html>

「Myrlie Evers-Williams' Inaugural Invocation」マリー・エバース・ウィリアムズの invocation 全文は下記を参照。

[http://www.huffingtonpost.com/2013/01/22/myrlie-evers-invocation-presidential-inauguration-full-text\\_n\\_2526801.html](http://www.huffingtonpost.com/2013/01/22/myrlie-evers-invocation-presidential-inauguration-full-text_n_2526801.html)

「Religion Tensions Over Prayers Cast Shadow on President Obama's Inauguration」

[http://www.huffingtonpost.com/2013/01/20/religion-tensions-inauguration\\_n\\_251119.html](http://www.huffingtonpost.com/2013/01/20/religion-tensions-inauguration_n_251119.html)

「Rick Warren's Inaugural Invocation」リック・ウォレンの invocation 全文は下記を参照。

[http://blog.christianitytoday.com/ctpolitics/2009/01/rick\\_warrens\\_in.html](http://blog.christianitytoday.com/ctpolitics/2009/01/rick_warrens_in.html)

日本語聖書表記はすべて、日本聖書刊行会発行の「新改訳聖書」に拠った。